『まんじ』76 号(2000.5)

仮名に着想を得たハングル

新井　宏

ハングルを韓国語あるいは朝鮮語のことだと思っている方が多いであろう。しかしハングルとは、李朝朝鮮で十五世紀中頃に制定された、世界で最も合理的かつ人為的な表音文字のことであり、いわば文字と発音記号を兼ねた表記法のことである。

母音が十字、子音が十四字の合計二十四字の基本字形から成り、それぞれの字形は、発音時の口形を写している。通常、基本字形を数文字を組み合わせて一文字につくる。当初は、婦女子の文字として正字の地位を得なかったが、徐々に広まり、二十世紀初め頃から、言文一致の動きで、ハングル漢字まじり表記が一般化し、第二次大戦後は、北朝鮮、韓国共に、完全なハングル書きに移行している。

韓国に行くと良く分かるが、現在では、全ての表記がハングルによっており、漢字はもとよりローマ字の表示も見かけない。近くて遠い国が、ますます遠くなる一因にもなっている。

もちろん、韓国や北朝鮮はもともと漢字公用の国である。日本よりもはるかに漢語に依存する度合いが強く、やや堅い文調のものなら、八十パーセント近くが漢字語から成立っている。したがって、全てを漢字表示にしてしまえば、朝鮮語を全く知らなくても、日本人ならほとんど理解できる。

しかもハングルは、日本のカナ文字のように一漢字を表音するのに二、三文字を要するようなことはなく、全ての漢字をその一文字で表現できる。だから、なれてしまえば、ハングル文字の羅列でも、さほど冗長に感じることなく、容易に漢字語が目に浮ぶようになる。知れば知るほど、その構成の合理性に驚く。

もちろん、ハングルは、朝鮮語固有のテニヲハや基礎動詞、基礎形容詞の表音にも優れている。しかしその機能だけなら、日本のカナ文字と大きく異なることはない。何よりも優れているのは、漢字語の表示に便利な点であ

る。だから、筆者の独断かも知れないが、ハングル文字は本質的には漢字音の表示のために開発されたものなのである。

その上、朝鮮語では、原則として漢字の読み方はひとつである。日本のように呉音あり漢音あり、訓読みあるなどということはない。例えば、各・角・脚・覚・殻・却・刻の七文字がいずれもKakとしか発音されない。したがって、ハングルの二十四基本文字を覚えてしまえば、朝鮮語を全く学ばなくとも、日韓で漢字語のほとんどが共通であるから、ある程度の読解はできる。

世宗の創案

このような特徴をもつハングルは、李朝第四代の世宗みずからにより一四四三年に創案され、三年間の準備を経て、一四四六年に公布されたという。公布当時は「民に教える正しい文字」という意味から『訓民正音』と名づけられ、現在とは異なり二十八字で構成されていた。世宗在位の頃は、李朝開国当時の功臣勢力が、もうほとんどいなくなり、科挙を通じて政界に進出してきた儒学者と、儒学的な素養を身につけた世宗が協同して、王道政治を夢見ることができる環境が整いつつあった。そのため世宗は、王立研究機関とも言うべき「集賢殿」に選りすぐった学者を集め、儒教政治の基礎となる儀礼制度を整備し、多方面の書籍を編纂刊行、学問を奨励して人材を育成し、科学技術、農業、医療、音楽などあらゆる分野で、輝かしい民族文化を開花させた。また、国土の開拓や拡張の面あるいは外交面でも、大きな実績を残し、韓国の一万ウォン紙幣にもその肖像が描かれている。一般には、ハングルは世宗によって創案されたと言われている。それは、世宗が一部みずから執筆し、学者にして政治家の鄭麟趾が説明を加えた書『訓民正音』の序文に、その制定の動機について、次のように書かれているからである。

国之語音、異乎中国、与文字不相流通、故愚民有所欲言、而終不得伸其情者多矣、予為此憫然、新制二十八字、欲使人易習、使於日用耳（わが国の語音は中国と異なるので、漢字を使っては表すことができず、民は言いたいことがあっても、言えなかった。予はこれを憐れみ、新しく、学び易く使い易い二十八文字を制定する）

当時は、中国文化至上主義の時代である。その中で、漢字は朝鮮語表記に不便だと言いきり、新しい体系の文字を採用しようとした考え方は、全く非凡で勇気ある発想と言わねばならない。君主の立場にあってこそ、思い付いた構想であったと言えるであろう。事実、かたくなに、ハングル文字に反対した学者も多く、ハングルが市民権を得るのは二十世紀に入ってからなのである。したがって、ハングル制定に見せた世宗の意気込みから見て

も、それが世宗の創案によると言われるのも尤もなことなのである。

しかし、ハングル創案のアイディアを世宗自らが出したとするならば、それは疑問である。当然、このアイディアを世宗に進言した者がいたはずであり、開発担当の実務者がいたはずである。しかし管見のかぎり、このように世宗創案説に異論を唱えているのを知らない。

もちろん、筆者がこのような主張をするには、腹案あってのことである。それは、十中八、九、申叔舟のアイディアになると思っているからである。

申叔舟の着想

申叔舟の名は、日本の歴史上でも良く知られている。それは、一四四三年の第四回癸亥通信使の書状官として来日し、日本に関する書『海東諸国紀』を著し、それが日本の中世の貴重な歴史文献史料として活用されているからである。

申叔舟がハングル制定に当たって、中心的な役割をはたしたのは、別に筆者が強調するまでもなく、周知の事実である。ハングルが制定公布される前年の一四四五年には、世宗の命を受けて、成三問と共に、明の翰林学者の黄賛の教えを得るため、十三回も遼東を往復している。その際、音韻学者である黄賛が、彼の言語学的能力に、極めて高い評価を与えたという。そのこともあってか、彼自身、音韻学に深い造詣をもつようになり、『洪武正韻訓訳』『四声通考』『東国正韻』などの音韻書を編纂するようになる。しかし、それはハングル創製に関与した結果であって、創案の着想を得たことは無関係のことかも知れない。

筆者が申叔舟をして、ハングルのアイディア創出者とするのは、別の理由である。それは、彼が日本の表記方法すなわち仮名や仮名まじり漢文について、十分な知識を有していたからである。もしそうであるなら、ハングルの創製に大きな影響を与えたのは日本の仮名文字ということになる。しかし残念ながら、このような主張をどこにも見かけない。

申叔舟は、一四一七年、工曹参判（科学技術省次官）の申檣の子として生れ、一四七五年五十九歳で亡くなるまで、六代の王朝に仕えた学者であり、外交官であり、政治家である。議政府の領議政すなわち当時の首相を二回までも勤めた人物で、学術関係の諸機関はもとより、外交から国防まで、あまねく歴任するなど、国家の枢機に参与しており、李朝朝鮮における最も著名な人物のひとりである。

その申叔舟が、集賢殿学士となったのは、一四四一年二十五歳の時である。この時期に彼は、集賢殿を中心として進められていた、世宗代の活発な学術・文化活動の中心的な役割を果たし、世宗の信任を得た。一四四三年

の訪日通信使の書状官として、彼に白羽の矢が立ったのも、世宗直々の意志によったものと思われる。

この頃の通信使の目的は、江戸時代とは異なって、主として倭寇の禁止要請であった。十五世紀の初頭、足利義満によって朝鮮や中国との国交が開始されたが、それは当時の東アジアにおいて、倭寇をも含めて交易のニーズが急速に高まっていたことを反映したものであった。幕府からも大蔵経などの貴重な品物を求めて、しばしば使節が送られている。日本産の銅が多量に朝鮮に輸出され始めたのもこの頃である。

申叔舟の参加した癸亥通信使は、李朝四回目の通信使で、正使卞孝文、副使尹仁甫で、一行五十余名が一四四三年二月にソウルを出発し、六月に室町邸に入り、国書を伝え、十月に帰朝している。使命は足利幕府の六代将軍の義教への弔慰と、七代将軍義勝の即位祝賀であったが、その間には西国大名との交流も行なっている。

もっとも、この時、室町幕府側では、この使節をあまり歓迎していない。それは、幕府の財政窮乏により、迎接準備の資金調達さえ困難で、何か難癖をつけて追い返してしまおうとする意見さえ有力であった。また、正使卞孝文が相国寺で将軍代理の管領と対面した時も、双方で座席配置を巡って、日本側が、朝鮮を朝貢国と見なしたのに対して、朝鮮側が対等を主張するなどの激しい応酬もあった。ただし、西国第一の大名の大内教弘は、一行を下にも置かぬ、極めてへりくだった礼で迎え、四船を発して一行を護送している。当時、大内氏は朝鮮に対して、銅の輸出を初めたところで、お得意先を接待する意味があったのかも知れない。

日本通の申叔舟

さて、申叔舟は、後に成宗の命により日本に関する書『海東諸国紀』を書くほどの日本通になるが、この時はもちろん日本行きは始めての経験であった。彼にとって幸せだったのは、一行中に副使尹仁甫がいたことである。尹仁甫は、一四二〇年には回礼使宋希璟に従い、一四二二年には回礼使朴熙中、副使李芸、書状官具敬之に従い、ともに通事として日本に渡航し、一四三九年には、ついに通信使高得宗を正使とする一行の副使として、日本に渡った経験を持つ有数の日本通であった。

申叔舟が、八ヶ月もの長期にわたる日本行の間に、尹仁甫から受けた影響は極めて大きなものがあったに違いない。日本に関する政治、経済状況はもとより、歴史、地理、産業、風俗について、直接現地に接しながら、尹仁甫から教えられた。その中でも注目すべきは、日本における表記法について知ったことである。

それは、『海東諸国紀』の「国俗」の項に、「男女と無く皆其の国字を習う。国字は加多干那（かたかんな）と号す。凡そ四十七字なり。唯僧徒は経書を読み漢字を知

る」との記載がある他に、対馬や壱岐の地名などを、あたかも日本の万葉仮名のように、漢字の音で表す方法をとっていることから推定できるのである。

申叔舟は、文章力と言語能力が卓越しており、語学の才にも恵まれていた。後に長く李朝の外交を管轄したこともあるが、明・日本・女真の使臣を迎える際に、通訳を必要としなかったと伝えられている。その中叔舟が、日本における仮名文字あるいは仮名まじり漢文表示に注目しなかったはずはない。

日韓両語の類似性

朝鮮語を学ぶとすぐに解るが、日本語と朝鮮語は、文法が全く同じであり、名詞に漢語を多用し、動詞や形容詞でさえも、漢語に語尾的な助動詞あるいは助形容詞をつけることで済ませている場合が多い。しかも、日本語のテニヲハにそっくりあてはまる助詞があり、「これ」「それ」「あれ」に相当する指示代名詞もある。だから、両国語に精通すると、日本語の文章をそのまま朝鮮語として読めるし、朝鮮語の文章を日本語として読めるという。

したがって、日本で発達したように、仮名を送って漢文を読み下すような方法が、朝鮮語でも可能であった。事実、日本の万葉仮名のような表記法の「吏読」が、ハングル以前には存在していた。この吏読とは、朝鮮語の構文に従って書かれた変則漢文に、漢字の音や訓によって、助詞、助動詞を書き加える方式であり、日本の宣命体に似ている。

しかし、吏読文字といっても、それは漢字であるため、漢字に精通している人でなければ使いこなせなかった。それに漢字音で繊細な朝鮮語の発音を正確に表すのは、もともと無理であった。そのため、漢文を読みやすくする目的で、句節ごとに朝鮮語の助詞を示す記号「口訣」も工夫された。それは吏読文字を略したものであって、日本の漢文の返り点のような役割であった。

このように朝鮮においても、漢文を朝鮮語的に読むための努力は続けられていたが、朝鮮語そのものを、仮名書き的に表記するまでには至らなかった。それは、朝鮮語があまりにも強く中国語の影響を受けていたため、漢文読み下しのレベルでも、何とか間に合ったという事情があったからである。

しかし、高麗時代の中頃から、僧侶たちを中心として、仏典を民衆にひろめるため、易しい文字に対するニーズが高まりつつあった。李朝が始まり、その基礎が定まった世宗の頃は、このような時代背景にあった。

漢字表音への格闘

日本においては、早くから仮名文字が発達し、日本語

の表記に用いられていたのに、朝鮮半島でそれが遅れたのには、もうひとつの原因がある。それは、日本語と朝鮮語では、発音に大きな違いがあったからである。

日本語では、原則として子音のみの発音はないが、朝鮮語では、多くの単語が子音で終音する。しかも、発音が豊富で、母音や子音の数が、日本よりもはるかに多い。そのため、日本では子音と母音の組合わせで、五十音の仮名を作れば済んだのに、朝鮮では一般に、子音と母音と子音の三音の組合わせで文字を作る必要があり、極めて多くの文字が必要となる。したがって、日本のように、五十文字で済むような仮名文字を開発することは、もともと無理であった。

しかし、日本語と朝鮮語の類似性は疑うべくもない。日本における仮名のような便利な方式を知れば、それを朝鮮語へ如何に応用するかは、申叔舟のように、言語的な天分ある学者にとって、さほど困難なことではない。そのような考えを帰朝して世宗に報告したに違いない。

そして、ハングル開発の作業が本格化した。まずは、片仮名のように簡潔な表記でなければならない。しかも、文字数を限定して、漢字音を表現しなければならない。そのためには、日本式のように子音と母音で一文字作るのでは、どうにもならない。そこに、音韻学の知識が求められた。

アルファベットを知っている現代人なら、子音と母音をそれぞれ独立の文字で表記する方式を、すぐに思い付く。言語能力に秀でた申叔舟なら表音文字の仮名に出会って、ローマ字的な表記には、思い至ったであろう。しかし、現在使われている日本語が、全てカナあるいはローマ字で書かれた状態を想像して見よう。とても読めたものではない。しかも朝鮮語の方が、発音が豊富で、子音終了形が多く、リエゾーンして発音する場合が多いのであるから、ますます実用的ではない。だから、子音と母音をそれぞれ独立の文字で制定しただけでは、全く実用に堪えないのである。

そこにハングル誕生の苦しみがあった。漢字の一文字の発音を一文字のハングルで表したい。この要求に正しく応えるには、音韻学の成果を取り入れるしかない。そこで、音韻学者の黄賛を訪ねて、遼東通いが始まったのである。

一般に使用される漢字は、約一万字であるが、発音数が一万種もあるわけではない。朝鮮語の場合でいえば、発音の数にして五百程度である。しかし、この五百と言う数値も、カナ文字的な表記とするには、あまりにも多すぎる。ところが、子音と母音と子音などに分解してしまえば、高々二十四の音しかない。これを一文字にまとめる。そのための格闘が、集賢殿で始まった。その中心人物の中に申叔舟がいたわけであるから、ハングル表記構想のアイディア自体が申叔舟によってもたらされたと

考えても全く不思議ではあるまい。

かくして、筆者が日本の仮名文字がハングル誕生に極めて大きな影響を与えたとする仮説に、ある程度納得頂けたであろう。

もっとも、このような仮説が検証されるためには、世宗によるハングル創製のプロジェクトが何時始まったか知らねばならない。申叔舟が帰朝したのが世宗二十五年十月なのに、ハングルの創案は、同二十五年十二月（太陽暦では一四四四年一月）と伝えられ、その間が二ヶ月であまりにも短い。

しかし、プロジェクトのスタートがいつの事であったか史書は伝えない。検証し得ないことには、学者は手を出さないので、いまのところ筆者の思い込みに過ぎないのかも知れないが、百歩譲っても、日本通の尹仁甫が、日本の仮名文字について、報告していた可能性もある。やはり、日本の仮名表記がハングル創製に大きな影響を与えたことは、十分に考え得るのである。

ハングルを創った人たち

ハングル創製に業績を上げたと伝えられる人物は、申叔舟ばかりではない。その他に、鄭麟趾、崔恒、李善老、朴彭年、成三問、李塏、姜希顔、などがいる。いずれも、世宗が目をかけた秀才ぞろいであっただけに、その後の李朝の政治に大きく登場するが、その多くが数奇な運命をたどる。それは、世宗の死後、李朝の恒例とも言うべき政争が悲惨な形で起ったからである。

李朝の歴史をひもとけば、始めから終りまで、骨肉相争う殺戮で彩られている。三代の太宗はふたりの異母弟を殺害して、傀儡の定宗を二代に立て、まもなく自分が即位した。四代世宗の子である七代世祖は、甥の六代端宗や異母弟ふたりに死薬を与え、九代成宗は十代燕山君の生母すなわち自分の妃に死薬を与えた。その燕山君は義母ふたりを斬殺し、祖母を撲殺、さらに異母弟ふたりに死薬を与えた。また十一代中宗もひとりの妃とその子を殺し、十二代仁宗は義母に毒殺され、十三代明宗は異母弟をひとり自決させ、十五代光海君は同母兄に死薬を与え、異母兄を部屋に閉じ込め蒸し殺しにし、さらに十六代仁祖の弟を殺害するなどの凄まじさである。その上光海君は、実父十四代宣祖を毒殺したとさえ疑われている。またその光海君の後継の長男夫婦も自殺して果てているし、十六代仁祖も自分の長男を毒殺し、更に長男の妃とそのふたりの子（自分の孫）を殺してしまっている。十七代孝宗は、仁祖の妃に死薬を与え、十九代粛宗も妃である二十代景宗の生母に死薬を与えた。きわめつけは二十一代英祖がその世継ぎの長男を米びつに閉じ込めて、餓死させてしまったことである。まだまだ続くが省略する。

世宗の死後起った血なまぐさい政争は、その子文宗が

在位わずか二年で病死し、文宗の子端宗が十二歳で位についたことで始まった。文宗の遺言によって、右議政の金宗瑞らの大臣が政権をにぎるが、世宗には秀才の誉れ高い有力な王子たち、すなわち端宗の叔父たちがおり、金宗瑞らとの間に抗争が始まる。ハングル創製に功あった集賢殿の出身者たちも、それぞれの人脈により、次第に色分けされて行く。

まず、最年長の鄭麟趾が、ライバル的な金宗瑞と合わず、世宗の次男の首陽大君、後の世祖に付く。これに鄭麟趾に近い崔恒が従う。一方、李善老は、最初首陽大君に付くが、それを裏切り、世宗三男の安平大君を担ぐ。また申叔舟は、首陽大君が明に使臣として赴いた時に同行し、中国語を駆使して大活躍したことによって、首陽大君の信頼厚く、その関係で、金宗瑞らに冷遇されていて、首陽大君派と見なされた。

これに対して、申叔舟とほぼ同年で、共に一四四七年、文科の高級試験に合格した若手の成三問、朴彭年と李塏は、文宗の遺言に従って端宗を守る立場をとる。成三問は、文科試験で首席を得た秀才で、申叔舟と共にハングル創製のため、明の黄瑧を訊ねて遼東に通った同志であるが、この頃は申叔舟と対立関係にある。成三問が貧しい家庭出身で、教条主義的なのに対して、申叔舟が良家の出身で、現実的な肌合いを持っていたことや、実力伯仲の中で、成三問に首席を奪われたことなどが、両者間の対立に関連したかも知れない。

このような経過の中で、首陽大君すなわち後の世祖は、だまし討ち的なクーデターで政権を掌握すると、政敵を徹底的に殺害し、端宗を脅かして王位を簒奪してしまう。

これに対して立ち上がったのが、成三問、朴彭年、李塏ほかの集賢殿出身者の六名である。しかし、そのクーデター計画は成三問の秀才的な逡巡から事前にもれ、世祖によって三族に至るまで非業な死に追いやられ、結局、端宗も殺害されてしまう。韓国では、この時の六名を死六臣と称して、あたかも忠臣蔵四十七士のように、ほめたたえている。なお、安平大君に付いた裏切り者の李善老も、安平大君同様に殺害されてしまう。

それに対して、世祖に付いた鄭麟趾、崔恒、申叔舟の三名は、いずれも相前後して領議政（首相）の地位まで登りつめる。申叔舟の場合は、世宗から成宗までの六代の王に仕え、領議政を二回も勤めたほか、終生外交を管轄し、文人でありながら女真族討伐の前線に出て、大きな実績を上げている。ただし、不倒翁的な政治経歴から、策略家と見られ、死六臣に比べると全く人気がない。

しかし、日韓の歴史学者の間では、申叔舟の評価、特に外交上の業績に対する評価が極めて高い。例えば、成宗の命によって一四七一年に書かれた『海東諸国紀』の記述にしても、日本や琉球について客観的に理解しようとする態度で一貫しており、主観的な記載や独断あるい

は偏見や蔑視が見られない。そのため、史料的な価値が極めて高いという。また、日本という国に関する認識も正確で、臨終の際に成宗に「日本と和を失わないよう」と遺言したとエピソードは伝えている。

いつの世も、事大（対中国外交）交隣（対日外交）が朝鮮の外交の基本であるが、日韓外交が紛糾すると、今でも必ず登場するのが、雨森芳州と申叔舟である。申叔舟は、極めて現実的な政治家で、それ故に、より憎まれる面もあったのかも知れない。

正義は妥協を許さず、時として、国や身を滅ぼすことが多いが、政治や外交は妥協こそがその要諦である。外交を長く管掌した申叔舟は、相手に対して、偏見や蔑視を持つことなく、正確な認識のもとで、交隣を成立させていた。その申叔舟が、わが国の仮名文字にヒントを得て、ハングルを纏めたとするならば、誠にうれしいかぎりである。

漢字禁止の弊害

さて、ハングルと申叔舟の関係については、この辺で筆を置くが、最後に漢字を捨てた北朝鮮と韓国について一言しておきたい。第二次世界大戦後、両国では漢字の使用を原則として禁止したが、このことによって失ったものはあまりにも大きい。特に今日に至るまで、漢字使用を厳しく禁止している北朝鮮は、そのことによって、歴史が途絶され、社会進展が大幅に制約され、大損をしたと言っても過言ではないであろう。さすがに韓国では漢字禁止の弊害に気がつき、いま是正へと動きはじめている。

文字としては、ローマ字に匹敵する程、多くの人たちが漢字を用いている。いわば人類共有の財産である漢字を自らの手で投げ捨てたことが、如何に馬鹿げたことであったか、北朝鮮の歴史が検証している。

確かにハングルは優れている。漢字に替り得るほどの素晴らしい性能を有している。しかし、その優秀性によって、漢字に取って代り、漢字の併用まで禁止するとなると話は別である。漢字圏の世界は、漢字の表意文字としての資産を共有していたのであって、表音文字としての機能を共有したわけではない。それは、今日の中国で、漢字表記は統一されていても、はなし言葉は大きく異なり、通じ合わない事情と良く似ている。各地域に適応した形、例えば、日本で言うならば、漢字仮名まじりの表現こそが、時代を先取りした表記法なのである。

いまや世界はコンピューター時代である。中国、台湾、日本、韓国、北朝鮮はお互いに協力して、書き言葉としての漢字の統一をはかり、その文化を守って行く必要があるのではなかろうか。